

◆ワークショップにおける討論について いろいろ思いつき

ワークショップを、これまで何百回も企画・運営し、万単位の人々の作業や討論をみてきた。それで思うのは、ワークショップは何度やっても難しいということ。いろいろ考える。

○女は女同士、男は男同士、年寄りも年寄り同士でやった方が面白いかも

男女共同参画についてグループ討論するとき、男女混合グループだと、どうも話が中途半端になる。男女牽制し合ったり、遠慮し合ったり、自分の家庭の実態や夫婦の機微について露見しないようにと気を使い、討論の場が、なんとも不思議な空気に包まれる。グループ内のメンバーに年齢差がありすぎるのも困る。70歳と50歳は離れすぎ。そこに30代、40代が入るのは、さらに厳しい。お年寄りが入ると若い人は嫌がる。説教されたり、苦勞話を聞かされたりするのが分かっているからだ。ワークショップは学び合いを目的とする面もあり、年齢・性別混合チームで討論することが多いのだが、たまには、女は女同士、男は男同士、年寄りも年寄り同士というのがあってもよい。子どもだけ、も面白いだろう（保護者・先生は邪魔）。

ヒトの男と女には、何百万年もの進化の中で生じた「脳の違い」があるらしい。同じことをするにしても、脳の使われる部分が男女で違うそう（NHKの番組でみた）。簡単に言うと、女は、平等の関係のもと言語能力を使って横並びでものごとを進める、男は、序列のなか空間認識能力を使って競争でものごとを進める、というような特徴があるらしい。男は狩猟、女は採集という、長い間の役割分担の結果、そんな違いが生まれた。女の人は地図を読むのが苦手だと言われるが、実は地図形式の情報を読むのが不得手だけで、目的地までの目印を小まめに示して、その目印の所でどちらに行くかを言葉で指示すると、迷わずに目的地に着ける。採集生活では目的物は逃げないから、目印をたどって順番に移動できればよい。そうして鍛えられた女の脳は、言語能力的空間把握をする。論理的でもある。男は、北へ進む、西へ曲がる、といった地図表示的な指示だけで行動できる。確かに、女の人は、花摘みとかミカン狩りには参加するけれど、キツネ狩りには参加しないだろう。男は、花摘みは長続きしない。こんな違いがあるなら、これからワークショップの作業の手順を説明するときは、全体の流れ図でゴールを一発で説明する方法（男向き）と、手順ごとの成果物イメージを一つひとつ説明し、これができたら次はそれを使って何をして・・・というように、目印とそこでの行動を関連付けて説明する方法（女向き）、2つを準備した方がよさそう。

こんなことも考える。例えば、誰かをいじめる方法について男女別グループで討論したら、きっと、女は「相手を孤立させておいて、迷いの森に追いやる方法」を考え、男は「相手を孤立させておいて、罠に追い込む方法」を考えるに違いない。そのように劇的に違うアイデアが出るなら、様々なテーマのワークショップで、男女別々に作業するステージを設けるのもありだろう。・・・なんか、ワクワクしてきた（ちょっと怖い）。

○直感はずごい かも

NASA「月で遭難したら」ゲーム（NASA MOON SURVIVAL TASK）というのがある（ネット検索で出てきます）。企業のリーダー育成研修などでよく用いられる討論課題だ。月面で遭難して母船に歩いて戻ることになったとき、15の品（マッチや酸素ボンベなど）の中から携行するものを選ぶとして、どれが大事か、1～15位まで優先順位をつけるというもの。これ

には、NASA の科学者グループの知見に基づく正解があって、個人やグループ討論で出した答が正解に近いかどうかをみる。

これを用いた研修の目的としては、出した答が正解に近いかどうかはあまり重要ではない。ただ、正解に近づくという点だけに着目すると、うまい方法がある（かもしれない）。どうするかというと、15品を一度に扱うのではなく、まず、直感で「大事そう」「そうでもなさそう」の2グループに分ける（両グループの品数に極端に差がない方がよい）。次に「大事そう」のグループ内で順位づけをし、次いで「そうでもなさそう」のグループで順位づけをする。最後に2つのグループをドッキングさせて、「大事そう」グループの最下位の次が「そうでもないグループ」の最上位というようにつないで、機械的に1～15位を決める。

実は、ほんの2、3人で試しただけなので、このやり方が優れた結果を出すことが多いと証明できたわけではない。（違ったら誠にすみませぬ。やってみた方はどんな結果だったか教えてください。）でも、なんかそういう簡便法がいけそうな気がする。地域づくりのシナリオを考えるワークショップでは、タウンウォッチングなどで集めた大量の地域資源の情報を目の前にして、それを処理しきれなくなることがある。こんなとき、直感で「使えそう」「使えなさそう」で資源を2グループに分け、使えそうなものから優先的に考える、としたらいいのではないかと思う。・・・ただし、直感2分法がかなり有効だとちゃんと証明できた場合の話。

直感で2グループに分ける際、その判断基準や分けるとき迷った点は何だったか、そのことについて議論するだけでも、いろいろな発見があり、発想が膨らむ。

OYES WE CAN

みんなにいるときは、YES WE CANと言えるが、一人のときは、なかなか言えない。だから、ワークショップで人が集まって、みんなの前向きな話をするのは基本OK。しかし、あいさつ運動やマイバッグ運動でも、みんなで話しているときは、YES WE CANだが、実際に行動する人は少ない。あいさつなど簡単なのに、なぜそうなるのか。たぶん、YES WE CAN は、明るい社会になる・ゴミが減るなどの目的が達成されることは是、という意味で言うのであって、自分がそのために行動できるという意味で言っているのではないからだろう。ワークショップでの討論は、あいさつをする・マイバッグを持ち歩くという「行動を（自分が）することに、お互い自信が持てたよね（Yes We Can）」と確認して終わるのがよい。達成すべき目的についてのみ話して終わるのが一番よくない。でも、そうなることが多い。

Oやる気になっている人だけを集めてやる

やる気のない人、まちづくりとか面倒だ、役所が言うから付き合いで来た、という人がワークショップをやっても無駄。ワークショップでやる気のない人のモチベーションを高めたり、そのまま行動する人に変身させたりするのは至難の業だ。やる気のある人、夢のある人を集め、その目的を達成するためにやる。それが当たり前だ。でも、そうじゃないことが多い。

Oどちらを選ぶ？

敵に追われて一本道を逃げてきた。目の前で、道はAB2つに分かれる。ここで止まれば確実に殺される。Aに進めば10%の確率で生き残り、Bに進めば90%の確率で死ぬ。さて、どちらの道を選ぶか？いままでたくさんの人に質問し即答してもらったが、答は全員Aだった。やはり、「生きる」という言葉が入っている方がいいのだろう。どさくさにまぎれて答を誘導するとき、こんな聞き方がどこかで使えそうだ。ただし、どさくさの状態でないとダメだけど。